

ゴッホの見た星空～南フランスを訪ねて～

石坂 千春*

概要

ファン・ゴッホが星空の絵を描いた南フランスのアルルとサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスを訪ねた。これらの絵が描かれた場所と方角について得られた知見を報告する。

1. はじめに

ポスト印象派の画家ファン＝ゴッホ(1853.3.30-1890.7.29)が「ローヌ川の星月夜」(オルセー美術館蔵、図1)や「星月夜」(ニューヨーク近代美術館蔵、図2)を描いた南フランスのアルルとサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスを訪問したので、報告する。

ゴッホは1888年2月から1889年5月まで南仏アルルで過ごし、その後アルルの北東に位置するサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスのサン＝ポール＝ド＝モゾール療養院に入所した。1890年5月にパリ近郊のオヴェール＝シェル＝オワーズに移るまでの2年間、ゴッホは文字通り病的といってもいいほど精力的に創作を行った。

この期間に描かれた「ローヌ川の星月夜」(アルル1888年9月)や「星月夜」(サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス1889年6月)は月や星の実際の動きと比較すると、描かれた星や月の位置に関する定説に疑問が生じる(石坂千春2012[1],2013[2])。

たとえば「ローヌ川の星月夜」(図1)は北斗七星を描いているとされているが、地上の景色から推測される方角(南西)に北斗七星が見えることはない。

また「星月夜」(図2)に関しては、描いた日時はほぼ同定されているが、その日の月の形や位置が実際の空とは異なっており、ゴッホがどの星を描いたのか特定されていない。

ゴッホは写実派であり、実際に見たものしか描けなかった画家だとされている[3]にもかかわらず、作品に描かれている星や月の位置が実際の空とは異なる、というのは奇異なことである。

今回、描かれた星を同定する判断材料として、絵が

描かれた場所を訪ね、画角や方角を調べてきたので報告する。

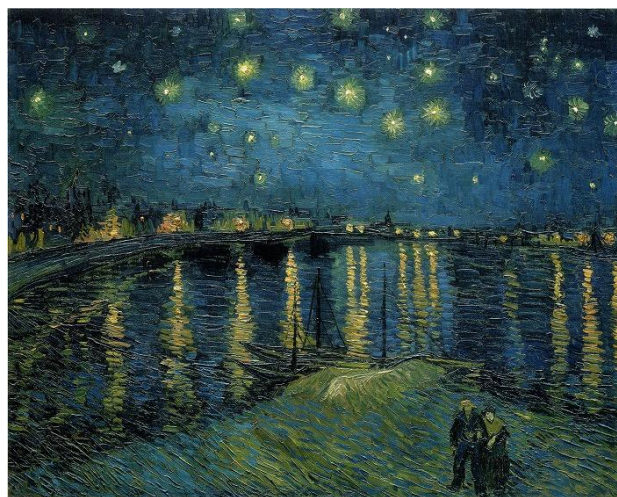


図1. 「ローヌ川の星月夜」(オルセー美術館蔵)



図2. 「星月夜」(ニューヨーク近代美術館蔵)

*大阪市立科学館主任学芸員／中之島科学研究所研究員
ishizaka@sci-museum.jp

2. 旅程について

旅程は表1のとおりである。

ローヌ川は源流がスイスを発し、南フランスを流れ下るフランス4大河川のひとつである。アルルで2又に分かれて地中海に流れ注いでいる。アルルは古代ローマの建築物が多く残っており「世界遺産」に登録されている。ゴッホは1888年2月に、パリから「日本にあたる南フランス」のアルルに移り住んだ[4]。

ゴッホはアルルで画家仲間と共同生活する理想郷を築こうとして挫折し、精神を病んだため、1889年5月からアルルの北東20kmに位置するサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスの療養院に入所した。

旅程もこの移動をなぞり、パリ→アルル→サン＝レミ→パリとした。

表1. 旅程表

日付	旅程	宿泊地
9/29 (火)	関西空港発 パリ着	パリ
9/30 (水)	パリ発 アルル着(「ローヌ川の星月夜」 を描いた場所等を視察)	アルル
10/1 (木)	アルル (アリスカン墓地等を視察)	アルル
10/2 (金)	アルル発 サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス着(「星 月夜」を描いたサン＝ポール＝ド＝ モゾールを視察)	サン＝レミ
10/3 (土)	サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス (エストリーヌ美術館を視察)	サン＝レミ
10/4 (日)	サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス発 アヴィニオン経由 パリ着(オルセー美術館視察)	パリ
10/5 (月)	パリ (ルーブル美術館視察)	パリ
10/6 (火)	パリ発	機中泊
10/7 (水)	関西空港着	

3. ゴッホが描いた星空の絵の画角と方角について

3-1. 「ローヌ川の星月夜」

「ローヌ川の星月夜」(図1)は1888年9月下旬に南仏アルルのローヌ河畔で描かれた。

ゴッホが「ローヌ川の星月夜」を描いた場所は、アル

ル駅から徒歩2分ほど南で、すぐに判明した。解説パネルがあったのである(図3)。



図3. 「ローヌ川の星月夜」が描かれた場所を示す
解説パネル

できるだけ図1と同じように見える場所を探し、撮影したものが図4である。



図4. ローヌ川東岸から南西方向を望む

ローヌ川はこの場所で北(図右手前)から南西(図右奥)に流れを変える。ローヌ川の下流方向(図右奥)にトランクタイユ橋が見える。手前に浮かぶ船は水上ホテルである。

現地でも実際に観察し、「ローヌ川の星月夜」は南西方向を中心に、真西～南南西の約80度の範囲が描かれていることがわかった。

絵(図1)と写真(図4)を見比べてみると、ゴッホは地上の風景を、見た目の印象を強調するのではなく、忠実に写し取って描いていることがわかる。絵の中央右寄りに小さな塔が見えるが、これはサン・マルタン教会である(図5)。この塔は「ローヌ川の星月夜」が描かれた場所に立って肉眼で見た印象では、とても大きく感じるが、写真(図4)では、非常に小さくしか写っていない。「ローヌ川の星月夜」でも、サン・マルタン教会の塔は小さく描かれており、ゴッホが地上の風景を写真のよ



図5. サン・マルタン教会

うに写實的に描いたことがわかった。

この絵は夜に描いたとゴッホ自身が記録している[5]ので、夜間に当該場所に行って観察したが、ローヌ川沿いに配置された現代の街灯は非常に明るく、背景の星も、街灯の向こう側にある地上の風景も視認するのが難しかった(図6)。ゴッホの時代にはガス灯であったので星は見えただろうが、地上

の風景は、もしかしたら昼間のうちにスケッチしていたかもしれない。



図6. ローヌ川の夜景と夜空

さて、「ローヌ川の星月夜」の最大のなぞは南西方向の空に北斗七星が描かれていることである。

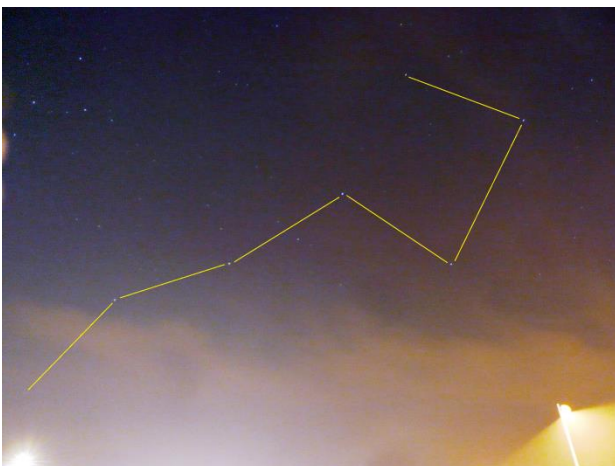


図7. ローヌ河畔から撮影した秋の大びしゃく

北斗七星ではなく、「秋の大びしゃく」(ペガスス座～アンドロメダ座～ペルセウス座)が描かれているのではないかとの仮説[1]を立証するため、現地で星空を観察した。

現地で画角を図6と同じにして撮影した「秋の大びしゃく」が図7である(撮影日時は2015年9月30日22:00、方角は東、線は加筆)。

結論から言えば、残念ながら描かれているのは「秋の大びしゃく」ではない可能性が高くなった。

「秋の大びしゃく」は、60度角以上の大きさがあり、幅80度の絵に対して大きすぎる。また、見上げるような高さがあり、絵の構図のように収まらない。

一方、北斗七星は方角が全く違うが、絵と同じ大きさ(約30度)である(図8)。またこの絵を描いた場所からは、北斗七星の方向(北)はちょうどローヌ川があり、地平線近くまで視界が開けている(図9)。



図8. ローヌ河畔から撮影した北斗七星

筆者はゴッホが手紙に、白い星だけから構成される北斗七星について「緑とバラ色に輝いている」と記述していることに注目していたが、ローヌ川の上は川霧がかかり、白い星が赤っぽい色に見えた。またキラメキの具合により、緑色に見える瞬間もあった。

先行研究が提唱してきた説のとおり、ゴッホはある意図が



図9. ローヌ河畔の北方向

あって、南西の地上の風景と北方向の北斗七星を合成し「ローヌ川の星月夜」を描いたということになる。

ゴッホの意図についてだが、今回、思うところがあったので記しておく。

まず、構図だが、川が横長の「C」字型に湾曲していることに着目した。

ゴッホは浮世絵の影響を強く受けたとされている[6]が、ゴッホ兄弟がコレクションしていた安藤広重の「名所江戸百景」にも、よく似た構図の作品が複数ある(たとえば「外桜田弁慶堀糶町」「小奈木川五本松」など)。特に「小奈木川五本松」は、湾曲した川の手前に船が浮かび、松の枝を支える棒木が大胆に川を横切るように縦に描かれているところが、「ローヌ川の星月夜」の川面に映るガス灯の反射光と対応しているように筆者には思えた。

構図を「小奈木川五本松」に合わせるためにローヌ川が湾曲した南西の方向を描いたとして、なぜその上空に北斗七星を描いたのであろうか。

北斗七星が「ローヌ川の星月夜」のような配置に見える方向は北北西である。アルルの北北西にはゴッホが後にしたパリがある。ゴッホはアルルに芸術家の理想郷を築くべく、パリの画家仲間たちを誘っていた(結局、誘いにのったのはゴーガンだけだった…)。

北斗七星はパリにいる画家仲間たちを象徴し、「ローヌ川の星月夜」はアルルに芸術家が集う理想郷の実現を願っているのではなかろうか。

それを示唆するように、ゴッホはこの絵について「…だから僕は夜、外に出て星の絵を描く。そして生き生きとした友の姿を描いたこんな絵をいつも夢見ている。」と弟テオへの手紙[5]に書いている。

なぜ星を描くことが「友の生き生きとした姿を描く」ことになるのか…北斗七星がパリの画家仲間を表しているとすれば合点がいく。

秋のこの時期、頭の真上近くには北斗七星と形がそっくりな秋の大びしゃくが見えている。ゴッホにとって、星空(を描いた絵の中)では、すでにパリの友がアルルに来ていたのである。

3-2. 「夜のカフェテラス」

「夜のカフェテラス」(図10)を描いた場所は宿泊したホテルのすぐ目の前にあり、フォーラム広場に面していた(図11)。

この絵では夜空が逆三角形に切り取られて描かれているが、方角を確認すると、空が見えているのは、ほぼ真南で高さ30度、幅30度の領域であった。

ゴッホは1888年9月中旬に、実際にこの場で「夜のカフェテラス」を描いたとされているので、星空シミュレーションソフト・ステラナビゲータ10で再現してみると、

星の配置は少し変わっているが、逆三角形に星がならぶ、やぎ座領域に一致しているように思えた(図12)。

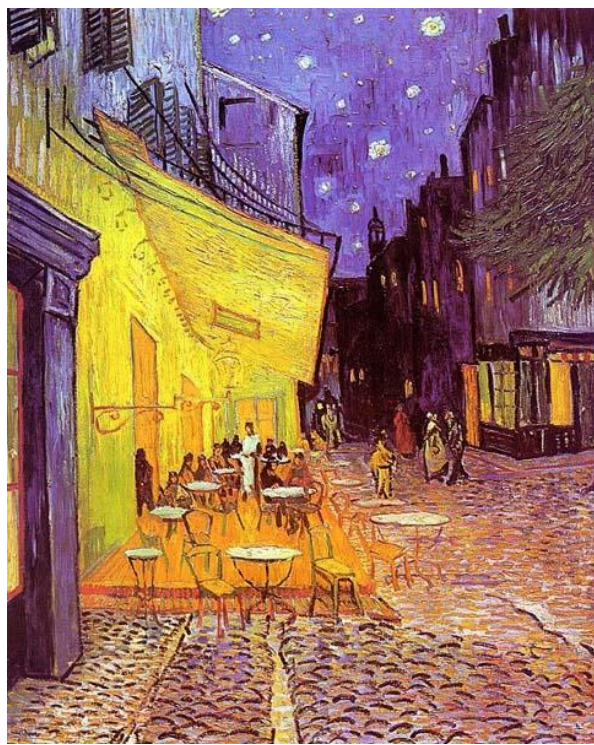


図10. 「夜のカフェテラス」(ミュラー美術館蔵)



図11. 「夜のカフェテラス」を描いた場所



図12.1888年9月9日22:30南の星空(ステラナビゲータ10で作図)。高さ30°付近にやぎ座がある。

ちなみに、屋並で夜空を大胆に三角に切り取る構図は、やはり安藤広重の「名所江戸百景」のうち的一点「猿わか町夜の景」に見られる。

3-3.「星月夜」

1889年6月に、アルルからほど近いサン＝レミ＝ド＝プロヴァンスのサン＝ポール＝ド＝モゾール療養院(図13)で描いた「星月夜」(図2)に関しても、現地調査を行った(図14)。

描かれている星は手紙の記述[6]から、明け方の東空に見えた月と金星ということになっているが、そのほかの星については諸説あり同定されていない[2]。

この絵の地上の風景はモンタージュであり、療養院の窓から実際に見えるものではない[3]。実際、公開されている「ゴッホの部屋」から眺めてみると、たしかに方角は東であるが、絵のような山も村も見えない(右上がりの木立の形は絵の中の遠景の山の形と似ているが、距離が全くちがう…)。その証拠に、同じ“山”の端が全く別の絵である「麦刈る人のいる囲われた庭」(ファン・ゴッホ美術館蔵)にも描かれている。窓から見た風景の印象は、敷地を囲む塀が描かれている点で、どちらかという「麦刈る人のいる囲われた庭」に近い。



図13. サン＝ポール＝ド＝モゾール療養院外観。公開されているゴッホの部屋は写真中央の2階にある。窓は東向きであった。その窓から撮影した風景が図14である。



図14. 公開されているゴッホの部屋から東を望む。鉄格子ごしに敷地内の畑と塀、その向こうにオリブ畑と木立が見えた。

ところで、ゴッホは寝室のほかにアトリエ用の部屋を持っていた[7]。このアトリエを描いた「アトリエの窓」(図16)という絵についてゴッホは「アトリエの窓から中庭の松を描いた」と書いている[7]。

療養院は「ロ」の字型の建物で、建物に囲まれた中庭(図16)は“ゴッホの寝室”からは西にあたり、廊下を隔てているため、見ることができない。

筆者は「星月夜」は病室から見た東側の空ではなく、アトリエから見た西側の空を描いたのではないかと仮説をたてた[2]。



図15.「アトリエの窓」(ファン・ゴッホ美術館蔵)

ゴッホのアトリエではないが、中庭に面した病室が公開されていたので、窓からの景色を観察した。

たしかに西を向いているが、中庭には松も見えず、「ロ」の字型の建物の反対側（西側）の壁がすぐそこに見え、視界は狭くない。

ふと、窓の形に注目すると（図17）、図15の「アトリエの窓」と形が違うことに気づいた。



図16.サン＝ポール＝ド＝モゾールの中庭
公開されている病室は2階の右角にある。

療養院のスタッフに尋ねたところ、ゴッホのアトリエは、この建物ではなく、現在も療養院として使用している北隣の建物にあったとのことだった。

北隣の建物は現在も療養院として使用されており、公開されていないが、建物の配置から、アトリエの窓は西に向いていることを確認した（図18）。

療養院の西方向にも山や村はないが、視界を遮るものがないため、空が広く見えることだろう。星空の様子を観察することはかなわなかったが、ゴッホが西の空を描いたという可能性[2]については棄却できないと考える。

ちなみに、「星月夜」では左手前に糸杉の大木が天をつくように聳え、右奥に山が見えているが、安藤広重の「名所江戸百景」では「王子装束ゑの木大晦日の狐火」が似たような構図になっている。



図17.公開されている病室の窓



図18.ゴッホのアトリエがあった建物。現在も療養院として使用されており非公開。窓の形が「アトリエの窓」と同じである。建物の西側に中庭が広がっている。

4. まとめ

ゴッホが星空を描いた南フランスを訪れた。見た目の印象と撮影された写真風景の違いなど、実際に現地に行ってみなければ分からないことがあり、有意義な調査ができた。

「ローヌ川の星月夜」については、画角と星の配置の関係から秋の大びしゃくをそのまま描いた、という自説は難点があるとの結論になったが、星の色や配置について新たな知見が得られた。

「星月夜」については、現地の実際の風景が確認でき、アトリエのあった建物について知ることができた。

今後、これらの知見を元に、自説の改良と、学校における天文教育のための教材化を行っていくつもりである。

本調査は、2015年度日本学術振興会科学研究費補助金（奨励研究）の助成を受けて実施したものである（15H00205）。

参考サイト

- [1]石坂千春、「『ローヌ川の星月夜』と“秋の大びしゃく”」、天文教育、Vol.24,No.1,pp.83-92(2012)
- [2]石坂千春、「ファン・ゴッホ『星月夜』考」、天文教育、Vol.25,No.1,pp.38-42(2013)
- [3]圀府寺司・著「ファン・ゴッホ 自然と宗教の闘争」（小学館）、2009
- [4]圀府寺司・監修・著「ゴッホの夢美術館」（小学館）、2013
- [5]1888年9月29日付、弟テオへの手紙(691/543)
- [6]1889年5月31日～6月6日ころの弟テオへの手紙(777/593)
- [7]1889年5月23日付、弟テオへの手紙(776/592)